

小学校教員の特質

武内 清

(上智大学名誉教授・敬愛大学客員教授)

同じ教員でも、小学校教員と中学校教員と高校教員では、何か違うと感じることが多い。それは、具体的にどのようなことからくるのであろうか。

高校教員の特質に関しては、我々の前回の調査で明らかにした（『高校教員の教育観とこれからの高校教育』研究報告No92、2018）。

高校教員は自分の担当教科への専門意識は強く、自分の教科の教育内容や教育方法には自負をもっており、文部科学省から提起される改革（学習指導要領の改訂を含む）には、比較的冷ややかな対応をしていることを明らかにした。

「先生ご自身は、日ごろの教育の中で、次のようなことを取り入れた教育を行っていますか」（Q14）の回答を、高校教員の回答と比較してみよう。

その結果は、小学校教員のほうが高校教員より、回答率の多いものがある。それは一人ひとりの子どもの個性、多様性、家族的背景への関心をもち、それらを考慮した教育指導をすすめる傾向である。

具体的にみると、日ごろ「とても行っている」の割合は、「障がい者への配慮」（小学校教員36.4%、高校教員15.1%）、「ひとり親家族への配慮」（小学校37.1%、高校17.9%）、「異なる文化的背景（外国籍等）を持った人への理解」（小学校24.1%、高校13.6%）、「性に対する多様性」（小学校14.0%、高校9.3%）と、小学校教員が高校教員より高い数値（配慮）となっている。それだけ、小学校教員は、児童の個性や人間性に配慮した指導内容や指導方法を意識していることがわかる。

また「これからの小学校教育のあり方」（Q18）に関する自由記述の中にも、教員の児童の個性や多様性の尊重、きめ細かい指導、そして家庭背景への配慮の必要性を指摘したものが多くみられる。それらをいくつか、抜き出しておこう。

「子供が多様性になってきている」「多様性に応じていかねばならない」「多様な発達や考えの子供が増えてきている中で、すべての子供たちに対応し、指導していかなければならない」「多様性、個性の尊重と共に、協調性などもとても大切だと思う」「個に応じた指導、支援のあり方をもっと考えたい」「個々の能力を認めること」「様々な価値観を認めていくこと」「心の面で、育てなければいけないところが大きい」「子供たちが伸び伸びと、生き生きと過ごして行けるような教育を行っていききたい」「子供たち一人一人をしっかり見守ることのできる環境を整えていくことが大切」「低・中学年は、人格形成、基礎学力、集団生活での力を身に付ける。高学年以降は、能力別、教科別学習を進め、個人の能力に合った学習を進めるべき」「能力に合った指導をしてあげることが、真の平等だと思う。飛び級や留年等、義務教育でもやってあげるべき」「特別支援の視点で配慮が必要な子供が多い」「いろいろな立場の人のことを考えて指導にあたらなといけない」「もう少し子どもと向き合える時間が欲しい」「多種多様な子どもに対応できる教員の育成は必要」

さらに、小学校教員を志望する教員養成課程に在籍する大学生の「目ざす教師像」も、教科の専門家というよりは、児童の個性や気持ちに寄り添い、それを伸ばしたいという子ども志向、人間志向の記述が多くみられる（敬愛大学教育学部1年生）。

「生徒一人一人の個性を引き出してあげられるような先生が私の理想の教師です」「誰よりも児童に親身に関わることを大切にしていきたいと考えています」「生徒1人ひとりに寄り添い、成長を支えられるような教師になりたいです」「差別や依怙最良をするのではなく、子供たち全員を平等に愛することができる教員を目指したいと思う」「教師は児童・生徒の人間形成に大きく関わる職業だと思います」

ただし、個々の子どもの個性、多様性に対応したきめ細かい指導や個別指導には時間がかかる。そのせいもあるのか、小学校教員の多忙感は、高校教員のそれに比べ、高くなっている。教員として「とても忙しい」（小学校教員52.4%、高校教員37.0%）、「かなり忙しい」（小学校42.6%、高校56.2%）、「忙しい」合計（小学校95.0%、高校93.2%）。教員の個々の児童への個別の対応が必要にしても、教員の多忙化の観点からも考える必要がある。

小学校教員の場合、文部科学省の改革や学習指導要領の改革に関しては、それほど抵抗感はなく、受け入れているように感じる。しかし、教科指導に関しては、高校教員のほうが、教科の改革の方向により敏感であるというデータも得られている。それをみてみよう（「とても」+「やや重要（賛成）」の割合）。

「アクティブ・ラーニング」（小学校教員82.5%、高校教員84.5%）

「児童生徒に関する調査やデータを踏まえた教育課程を編成、実施、評価」（小学校66.8%、高校85.9%）

「社会や保護者などの要望を取り入れて、教育課程を編成すること」（小学校47.3%、高校62.8%）

小学校教員は高校教員に比べ、児童への寄り添い意識や人間形成志向が強いが、一方で、教科の専門家としての意識は低い。小学校教員の子ども志向や人間志向は、児童・生徒の発達段階に対応した「適切なもの」と評価できるが、同時に各教科への関心が芽生える段階の児童への教科指導の重要性への意識や研鑽も、教員養成の段階の教育も含めてさらに必要であろう。小学校への「教科担任制の導入」が議論されているなか、この問題を考える必要があるように思う。